J.シュトラウス 2 世：喜歌劇《こうもり》 序曲

19 世紀の中頃、ウィーンで人気を博していた J.シュトラウス 2 世（1825-99）は、オペレッタも数多く書いた。なかでも名高いのが、1874 年に初演された《こうもり》。その「序曲」には、快活な開始からメランコリックなワルツまで、本編に登場する魅力のメロディがふんだんに盛り込まれている。

J.シュトラウス 2 世：ワルツ《ウィーン気質》

“ワルツ王”と呼ばれる J.シュトラウス 2 世は自身の楽団を率いて演奏し、ブラームスやワーグナーと同時代にあって、大衆の絶大な人気をさらった。本作は、オーストリア＝ハンガリー皇帝の娘とバイエルン王子の結婚を祝うために作曲されたワルツ。典雅で快活な音楽は、まさに“ウィーンっ子”の気質を捉えている。

ブラームス：ハイドンの主題による変奏曲

「交響曲 第 1 番」を書くのに 20 年余りを要したブラームス（1833-97）は、同曲の完成に至る途上で様々な管弦楽作品を試作したが、この「変奏曲」はその最上の成果と言えるだろう。ハイドンの「ディヴェルティメント」に使われた“聖アントニーのコラール”を主題として、ブラームスらしい多彩で緻密な変奏を施し、パッサカリア形式による堂々たる終曲で締めくくる。

サン＝サーンス：歌劇《サムソンとデリラ》 より **「あなたの声に心は開く」**

サン＝サーンス（1835-1921）は、どんなジャンルにも通じた精巧なる多作家。オペラも 10 指に余るが、なかでも旧約聖書のサムソンの物語を題材とした歌劇《サムソンとデリラ》は人気が高い。サムソンを陥落させようとデリラが情熱的に歌うこのアリアは、官能的な色彩をまとった、美しい旋律に彩られている。

ビゼー（J.フバイ編）**：《カルメン》による華麗な幻想曲**

ビゼー（1838-75）の歌劇《カルメン》は名旋律の宝庫であり、サラサーテらがこぞってヴァイオリン技巧を最大限に引き出すコンサートピースに編曲した。ハンガリーの名手フバイ（1858-1937）もその一人で、「ハバネラ」、「闘牛士の歌」、「ジプシーの歌」などを散りばめ、華麗なヴィルトゥオージティを発揮させる、熱狂的な幻想曲となっている。

マスネ：タイスの瞑想曲

フランスの作曲家マスネ（1842-1912）は《マノン》や《ウェルテル》など人気オペラを書いたが、歌劇《タイス》で間奏曲として演奏される「タイスの瞑想曲」がなんといっても有

名。様々な楽器で演奏され、その旋律の甘美さは比類ない。

ドヴォルザーク：我が母の教え給いし歌

ボヘミア(現在のチェコ)のドヴォルザーク（1841-1904）は、稀代のメロディ・メーカー。どんなジャンルでも彼の音楽には故郷の自然を感じさせる素朴な“歌”が息づき、歌曲においてもその天賦の才が発揮された。本曲は歌曲集《ジプシーの歌》の 4 曲目で、亡くなった母親への想いが切なく、美しい。

ヴェルディ：弦楽四重奏曲 より **第 1 楽章**

ヴェルディ（1813-1901）が残した、唯一の弦楽四重奏曲。《アイーダ》の上演中、歌手のアクシデントで時間ができたために書いたという変わり種だ。しかし、最充実期の巨匠の手になるものは、片手間といっても聴き応え十分。この第 1 楽章もオペラのようにドラマティック。

ヴェルディ：《レクイエム》 より **「アニュス・デイ」**

1868 年、母国の偉大な先輩ロッシーニ（1792-1868）の追悼を機に、ヴェルディは畢生の大作となる《レクイエム》の作曲に着手。紆余曲折を経て、6 年後に完成した作品は、従来の宗教曲の概念を超える劇的なものとなった。この「アニュス・デイ(神の子羊)」では“神の子羊（＝イエス・キリスト）に安息を与えたまえ”と切実な歌声が響く。今回は、リスト編曲によるピアノ版でお届けする。